#### 災害の経験を伝える」 活 動 動 向

「災害かたりつぎ研究塾」の合宿活動をもとにして

一部を割愛した内容を掲載したものである。(二〇一四年六月七日)において、同題目で行った報告について、本稿は、著者が第三八回日本口承文芸学会における公開講演

## 1 災害かたりつぎ研究塾

去に災害が起きた場所を訪ね歩き、そこでどのような活動が 合宿 年度に「災害かたりつぎ研究塾 きおくみらい、 れているのか、 議論する取り組みである。 北大学災害科学国際 (十一月)、 人と防災未来センターが中心となり、 冬合宿 どのような特徴があるのかを、 (十二月) 研究所、 (図1)」を夏合宿 と三回開催した。 長岡震災アーカイブセンタ 合宿形式で調 これは、 (八月)、 過 秋 ĺ 行

阪

神・

淡路大震災である。

開九

!催時点で発災から十八年をむかえ|九五年に神戸を中心として起きた

対象にした。一つ目は、

一〇一三年度は、

近年起きた被害の大きい

三つの

地

震災害を

年に起きた新潟県中越地震である。開催≒六○○○名以上に上るという特徴がある。

開催時点で発生から九

二つ目は、

1000

た。

マグニチュ

1

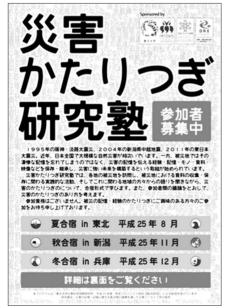


図1 災害かたりつぎ研究塾

ド7・3、死者は直接死と関連死を含めると佐藤翔輔

いた。死者・行方不明者は一万八○○○人を超える。本大震災であり、二○一三年の段階で発生から三年目となって

各合宿については、それぞれホストを設けた。冬合宿(神戸)各合宿については、それぞれホストを設けた。冬合宿(神戸)な、災害科学国際研究所が担当した。本学自体はミュージアム機能を有していないが、災害アーカイブセンターきおくみらいが担当した。上位機関の中越メモリアル回廊という大きな連携組織で災害伝承に取り組んでいる。東日本大震災(夏合宿)では、東北大災害科学国際研究所が担当した。本学自体はミュージアム機能を司していないが、災害アーカイブの構築を中心にして、災能を有していないが、災害アーカイブの構築を中心にして、災能を有していないが、災害アーカイブの構築を中心にして、災害に承に関する現地調査・研究等に取り組んでいる。

については詳細を述べる。本稿では、三つの合宿の内容を概観する。特に夏合宿(東北)

してもらった。

### 2 夏合宿 in 東北

や、他の地域の災害も勉強して自分の活動に取り入れようとい災害伝承を職業にされている方(語り部、ガイド、学芸員等)る方に参加者に限定させていただいた。大学や研究機関のほか、した。本合宿は有料とし、身銭を切って、ともに議論してくれ「災害かたりつぎ研究塾夏合宿:n東北」の募集定員は三十名と

り、述ベ三十一名の参加となった。

研究所)にお務めいただき、冒頭のあいさつをいただいた。を設けており、夏合宿では、川島秀一教授(東北大災害科学国際駅をバスで出発し、車中で開講式を行った。各合宿には、合宿長時系列に沿って説明する。一日目(八月八日)の冒頭は、仙台

人の隊員から、活動の内容や現場で感じていることを車内で話たえ隊」の隊員の話を聞く時間とした。「みちのく・いまをつたたえ隊」というプロジェクトは、被災地域の住民の方にご協力いただいて、写真撮影、チラシ・掲示物の収集、インタビューなだがいて、写真撮影、チラシ・掲示物の収集、インタビューなだがいて、写真撮影、チラシ・掲示物の収集、インタビューなただいて、写真撮影、チラシ・掲示物の収集、インタビューなただいて、写真撮影、チラシ・掲示物の収集、インタビューなただいて、写真撮影、チラシ・掲示物の収集、インタビューなにでいる。この時間を有効にバス移動が合計で三〜四時間あるので、この時間を有効にバス移動が合計で三〜四時間あるので、この時間を有効に

内にも当時の記録などが多く展示されている。所になっている。店長から被災の経験談を伺うことができ、店和山は高台となっており、津波が来た場合の周辺の津波避難場和山は高台となっており、津波が来た場合の周辺の津波避難場の移動の後は、石巻市で昼食となる。津波被災を受けて、

今回の震災で特徴的な取り組みの一つである。これは、石巻市次に行ったのは、「3・11あすのためのミュージアム」である。

階段昇りを体験してもらった。 ただいた。当日は、その展示内容の見学と、津波避難ビルの外 究所が、展示の内容を収集し、レイアウトする試みをさせてい ター、長岡震災アーカイブセンター、東北大学災害科学国際研 そこで、3・11まるごとアーカイブスと、人と防災未来セン 関する展示スペースにできないだろうか」という相談を受けた。 段の利用はほぼない。 受けて助成制度を活用して運営しているが、津波避難ビルの最 が、すでに再建がなされている。市から津波避難ビルの指定を アムがある。同ビルは浸水エリアにあり、 階は、基本的には避難者を一時的に収容する場所なので、 同社社長から「普段利用として、震災に 大きく被災している

示 · 新聞を出そうと、避難所に手書きの壁新聞を発行していた。そ 同社は、 巻日日新聞社」という地元新聞社が設置した展示施設である。 壁新聞の実物と当時のことや現在の石巻の状況についての展 次は、「石巻 NEWSee (ニューゼ)」に向かった。ここは 紹介がなされている 震災と同時に新聞を発行する機能を失ったが、何とか 石

がおり、 の事業を体験させていただいた。 る。 震災の語り部の事業を行っている。 この日は二名の方にお話しいただき、 地NPOであるみらいサポート石巻は、 団体・個人でも、 語り部の話しをうかがうことができ 十五~二十名の語り部の方 石巻の震災の語り部 被災者と連携して

> ち早く伝承事業に取り組んだ県内図書館である。 談を映像として撮影し、編集したものを館内で自由に閲覧でき は、震災に関するスペースを設けたり、 が「東日本大震災を語り継ぐプロジェクト」を行ってい 次に、 東松島市に向かった。東松島市では、 担当者が被災者の体験 東松島市図書館 図書館の中に

にある宮城エキスプレス株式会社のビルの五階にこのミュージ

で宿泊した。付近には五~六軒の民宿があるが、 の一軒しか再開していない。 るサービスを行っている。 その後、 東松島市の月浜というところに行き、 夕食のときにはおかみから当時の 当時はまだこ 民宿

山 根

体験を聞くことができる。

閖上に到着した。「閖上の記憶」という事業が行われており 宿を終えた。夏合宿の様子を図2に示す。 をした後、 示のほか、語り部による移動式の被災地の案内も体験した。 く・いまをつたえ隊」の隊員からの話を聞きながら、 最後は、 翌日(八月九日)は、名取市に向かった。 簡単なディスカッションやふりかえりを行い、 「閖上さいかい市場」という仮設商店街に行き、 移動中は、「みち 名取市 展 0 0

#### 3 秋合宿in新潟

中越地震の一連のメモリアル施設のことを指す。 エリアは広域にわたっており、 秋合宿は、 中越メモリアル回廊にうかがった。 しかも、面的な被災というよりも、

者四つの施設を中心にまわった。 から構成されている。 モリアルパークからなる計七つの拠点 連携しようと、四つの施設と三つのメ うために、点と点をつないだ「面」で る状況にある。効果的な伝承事業を行 主な被災地がスポット的に点在してい 秋合宿では、

きる。 る。航空写真中には、ARマーカーが だけで、中越地震の全体像を俯瞰でき なっている。その床上航空写真を見る という被災地全体を写した航空写真に の床が、長岡市、小千谷市、 センターきおくみらいがある。 を知り、それをもとに各地に行く、 ポイントの詳細な情報を知ることが ミュージアムそなえ館に行った。 いうことを意図して設計されている。 長岡市には、 次は、小千谷市にある、おぢや震災 同センターで中越地震の全体像 タブレット端末をかざすと、 長岡震災アーカイブ 旧川口

災」をテーマの中心にした展示はなさ 設は、「そなえ」の名称のとおり、



だけではなく、ビニールハウスも避難

活をしていたかを展示したり、

備えに関

するクイズ端末もある。

次に行ったのが、川口きずな館である。

ウスの当時の状況を再現して、どんな生 になったことが挙げられる。ビニール 村地域で起った災害であるので、

れている。中越地震の一つの特徴は、



図2

行った事実について、その状況をこの場

地域や団体から支援を受けたり、 所である。同館は復興に際して、

連携を 様々な 旧川口町は、

中越地震の震源であった場

持っており、 に向かった。旧山古志村は、 時系列の情報を見ていくという形になっ の箱の機能を複合させて、 は、前述のきずな館と似たような機能を に避難した地域である。この復興交流館 が孤立してしまい、全村民が隣の長岡市 ている。 に記憶としてとどめること意図している。 最後は、やまこし復興交流館おらたる 当時の仮設住宅を再現した展示 山古志の被害実態、 山古志の中で 当時、 今まで

### 4 冬合宿:11神戸

を合宿で体験した一つ目の事業は、「まち歩き」である。ボランティアによるまち歩きの事業を体験し、まちを歩きながら震災ンティアによるまち歩きの事業を体験し、まちを歩きながら震災当時の様子を教えていただいた。人と防災未来センターには、「語育のための施設で、ここには「震災体験学習」という避難所生活育のための施設で、ここには「震災体験学習」という避難所生活育のための施設で、ここには「震災体験学習」という避難所生活音が表ができるメニューがある。体育館の中で宿泊をしたり、炊きと体験できるメニューがある。体育館の中で宿泊をしたり、炊きと体験できるメニューがある。「当人と防災未来センターには、「語学なが、お話を付った。」である。ボラダンボールを板張りの床に敷くことを実際に行う。また、この地域人材支援センターにも地域の方から当時のお話を伺った。

# 5 東日本大震災のかたりつぎの特徴 (三年目)

できると考える。「無形」「仮設」「連携」という三つのキーワードで述べることがりつぎ」は、どのような特徴があるかをまとめてみた。それは、らつぎ」は、どのような特徴があるかをまとめてみた。それは、三つの合宿を通して、東日本大震災における三年目の「かた

## -1 無形:口頭伝承とデジタル

したものである(佐藤ら、二〇一四)。ピングしたものを図3に示す。これは、著者が先行研究で調査

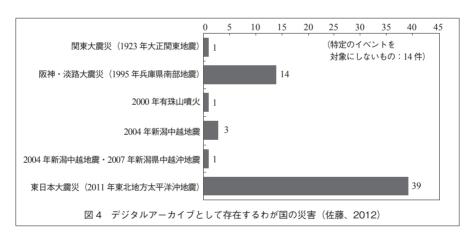
日本にある災害の記憶を伝えるための機能や拠点、活動をマッ

図3では、濃色マーカー(青色)がミュージアム・資料館、 ※色マーカー(緑色)が語り部・被災地案内、白色マーカー(黄 変を見ると、淡色(緑色)のマーカー・語り部・被災地案内が 東北の太平洋沿岸に集中している。(かっこ内は、下記ウェブサイト中のマーカー色。https://sites.google.com/site/dcrcssato/)震 災から二~三年後では、形ある恒久的なミュージアムや施設まだ存在せず、東日本大震災のエリアでは、基本的には「無形」であって、語りや現地案内で伝えるような口頭伝承による活動であって、語りや現地案内で伝えるような口頭伝承による活動が中心的であることが分かる。

災害科学国際研究所でやっている「みちのく震録伝」である。ことを指す。図4に調査したものを示す(佐藤、二〇一二)、一番古いのは、関東大震災のものである(発生当時に作られたものではない)。阪神・東大震災のものである(発生当時に作られたものではない)。阪神・東大震災は、当時がインターネット黎明期であるせいか、十件以上のデジタルアーカイブが誕生している。東日本大震災に関するデジタルアーカイブが延生している。東日本大震災に関するデジタルである」ことを指す。図4にもう一つの「無形」は、「デジタルである」ことを指す。図4に



図3 「災害の記憶・記録の場」調査結果の空間分布(佐藤ら、2014)



され 0 された定点写真を閲覧でき ようになっている。 しており、 れは二〇一三年に既に公開 学災害科学国際研究所、 く風景」などのウェブサイ 津波浸水」、被災地で撮 る ようとする取り組みは、 件以上のコンテンツが を通して誰でも利用できる を抽出・利用できる。 末尾 -がある シタル ほ このように「電 「復興へ 的 か、 東日本大震災を伝承 ヒトの目に映る3・ ており、 関連する写真や資 アーカイブ以外にも に U R 鳥瞰的に可視化 津波痕跡の高さを虫 みらいサポー (いずれも東北大 インターネ カワルみち キーワー L掲載)。 子 0 登 1 K 本 0 影 11 す デ 方 石

端末による発信も盛んに行われている。ビュー映像を見ることができるアプリのように、タブレット型ら、二○一四)、東松島図書館が設置している被災体験のインタ巻が防災まち歩きで活用している「石巻津波伝承AR」(中川

## 5-2 仮設:一時的な展示

よりも前に設置された仮設的な位置付けにあるのが現状である。という展示も、プレハブの中にあるため、仮設の展示であると言える。みらいサポート石巻は、「つなぐ館」という仮設のの保存等についての構想があるもので、 現在は、恒久の展示である。本格的なフィールドミュージアム、復興祈念公園、遺構いる。本格的なフィールドミュージアム、復興祈念公園、遺構いる。本格的なフィールドミュージアム」の展示は、恒久の保存等についての構想があるものの、現在は、恒久の保存等についての構想があるものの、現在は、恒久の保存等についての構想があるものの、現在は、恒久の保存等についての構想があるものの、現在は、恒久の保存等についての構想があるもの、現在は、恒久の保存等についての構想があるものの、現在は、恒久の保存等についての構想がある。

## 3-3 連携:プロジェクト間の融合

災センター、東京のNPOの東北アーカイブ、二○世紀アーカている。この会議体には、東松島市図書館、三陸アーカイブ減会議という会議体を設けている。二○一三年九月にスタートし会議という会議体を設けている。二○一三年九月にスタートし重という会議体を設けている。二○一三年九月にスタートし三つ目のキーワードは「連携」である。宮城県内では、東日三つ目のキーワードは「連携」である。宮城県内では、東日

つくっている。基本的な目的は情報交換にある。し合って、互いに助け合ったり、相互応援するという考え方で載)。出入り自由であり、産学民は一切関係ない。各活動を尊重イブ仙台、多賀城市などが参加している(本稿末尾に URL 記

もう一つ、非常に特徴的な連携の事例として、「石巻地方語

いる。ガイドのための標準テキストなどの作成も試みられている。ちいいか、どのように伝えたらいいかについての勉強会を行って見学・体験されるなかで、情報交換のほか、どのように案内した見学・体験されるなかで、情報交換のほか、どのように案内した部・被災地ガイド連携検討会」がある。石巻地方内にある。語り

# 提出レポートに見られる論点(夏合宿ⅰ□東北)

6

夏合宿の三十一名の参加者には、終了後にレポートを書いて 夏合宿の三十一名の参加者には、終了後にレポートを書いて しか起いただいた。その主な論点は次のとおりまとめられる。

り話が整理され、いわゆる教訓を明示的に述べるものと中越、神戸では発災からの時間が経過していくなかで、語変化する。東北の語りは「生々しい」という印象がある。

味で生々しく伝えている。 なっている。今の東北での語りは、当時のことを、良い意

(3) 豊富なアーカイブ資料やニューデバイスなどと、語り・案

- 内が連携している。
- 4 震災の伝承を「仕事」としてされている。今後、これをど う継続するか、という経営の問題がある。
- (5) 市民は主体的に関わるためにはどうしたらよいか。
- 6 東日本大震災では内陸の方にも被災体験がある。特に仙台 市などは深刻な宅地被害を受けている。このような非沿岸 (影の部分) の記憶をどう継承するか。

#### 7 これまでの津波被害は?

川島秀一教授、国立歴史民俗博物館・林勲男准教授をお招きし 東北大学・首藤伸夫名誉教授、東北大学災害科学国際研究所・ をレビューするために行った。当該分野のトップ研究者である、 の津波災害では、どのようなかたちで伝承が行われてきたのか れは、東日本大震災のかたりつぎを調査・議論する前に、過去 「『津波災害の記憶を巡る』シンポジウム」を開催している。こ 災害かたりつぎ研究塾 夏合宿:n 東北の前日(八月七日)に、

(1) かたりつぐ手段は多様である。口碑、津波碑、津波石、記 念·資料館、朗読、歌、絵画、 儀礼などがあり、最近はこ

僭越ながら、三先生の講演を次のようにまとめた。

こにICT技術が加わる(首藤、川島、林)。

2 伝承においては「家」が強い。祖父母もしくは親から伝わ る内容が継承されやすい(川島)。

3 「津波が来たこと」以上は残りにくい。「津波が来た、ここま たか、どのように復旧・復興したのかは伝わりにくく、どう できた」ということは継承されやすいが、そのときどうだっ

(4)「津波をかたりつぐことは難しい」「五年もすれば大抵おさ したら被害の軽減につながるかまでは伝わっていない(川島)。

まるでしょう」「二十年後に会いましょう」(首藤

究において、伊勢神宮の式年遷宮は二十年周期であることを例 にとり、物事を伝承する限界期間であることが言及されている この「二十年」というのは重要な節目になっている。先行研

(首藤、二〇〇八)。

## 8 いま、東日本大震災の被災地では

巻のガイド、石巻観光協会のガイド、閖上の記憶の来館者数 について立ち返る。 図5に、女川町観光協会のツアーガイド、みらいサポート石 ここで、改めて東日本大震災の被災地でのかたりつぎの現状

利用者増加している。しかし、二年目、三年目に比べると、最 閖上の記憶のガイドの利用者数を示す。 震災発生から二年目周辺にあたる二〇一二年一月から徐々に

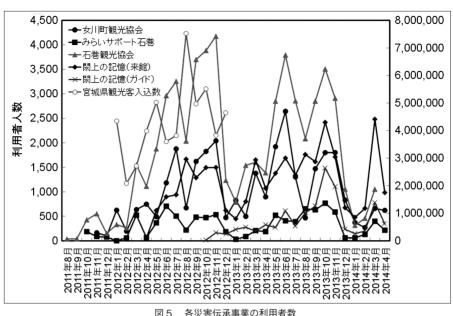


図 5 各災害伝承事業の利用者数

が、

やや減少傾向にあるということと、

ツ

アーや研修におい

· て 利

年目から三年目にかけて、

災害伝承のガイド

や施設の利用

者

9 稿では、 お わりに

ということが重要であるいうことが、

現段階でよく分かる。

用されているために、そのような団体利用者をいかに継続させる

いて述べた。 中で明らかになってきた東日本大震災のかたりつぎの現状に 連携」という特徴があることや、各地で語り部、 発災から三年目が経過した現在では 災害かたりつぎ研究塾 0 取 り組 みを紹介し、 被災地ガイド、 「無形」 仮設

近は徐 わられている担当 はなに減少傾向にあることが読み取れる。 一者は、 実際の事業に関

九月~ 夏休 が推 ほほ同じである。 感しているという。 行会社が閑散期のてこ入れとして被災地のツアーやガイド ガ |〇| 二年も二〇 :み期 1 測 !できる(グラフ右側軸)。 K 十月である。 は、 間が最も多い。 その逆である。 宮城県観光客入込数と比べると、 0 目のピー 年 このような傾向を「現場感」として実 しかしながら、 ŧ 関係者からの聞き取りによれば、 ク時が六月、 利用者は増加するピー 宮城県観光客入込数をみると、 被災地の案内や語り部 二つ目 っ この ピー ク 期 原 ク 間 'n が が

を抱えていることを述べた。展示が盛んに行われている一方で、今後の継続的な発信に課題

のあり方について議論を深めていく。

査するとともに、世代を超えて受け継がれる効果的な伝承方法

今後も、東北における震災のかたりつぎについて継続的に調

#### 参考文献

5巻)、pP七八−九六、古今書院、二○一四・九の論』(「FENICS 百万人のフィールドワーカー」シリーズ第の論』(「FENICS 百万人のフィールドワーカー」シリーズ第の論が、一東日本大震災での住民参

謝辞

害学会年次学術講演会講演概要集、pp−−二、二○一四·九における災害伝承に関する量的分析の試み、第33回日本自然災佐藤翔輔、今村文彦、川島秀一、今井健太郎、首藤伸夫:わが国

ミュニティにおける災害の記憶の継承、二○一二・一一ンポジウム「大規模災害とコミュニティの再生」、第3部:コ佐藤翔輔:我が国における津波災害の記憶を巡る試み、国際シ

ヒトの目に映る3・11津波浸水」(http://michinoku.irides

tohoku.ac.jp/ttjt/ttjt\_view.html)

「復興へ カワル・みちのく風景」(http://michinoku.irides.tohoku.ac.jp/photovr/map.html)

み―石巻市における「防災まちあるき」実践事例―、日本崎麻里子:被災地の震災伝承におけるAR技術活用の取り組中川政治、尾形和昭、宇田川真之、阪本真由美、佐藤翔輔、山

八七、二〇一四·一〇·二三-二六 災害情報学会・日本災害復興学会合同大会 in 長岡、 PP.八六-

工学研究報告、No.25、PP-七五-一八四、二〇〇八首藤伸夫:記憶の持続性―災害文化の継承に関連して―、津波「宮城県東日本大震災アーカイブス連絡会議」http://311da.com/

http://311da.com/ 定災アーカイブス連絡会議

(さとう・しょうすけ/東北大学災害科学国際研究所)

アーカイブ学の探求」(研究代表者:佐藤翔輔)によるものである。 科学国際研究所)、林勲男准教授(国立民族学博物館)による助言を 学)、今村文彦教授(東北大学災害科学国際研究所)、平川新教授 研究種目B「災害の記憶・記録に関する拠点間の連携を通した災害 科学国際研究所・平成 25-26 年度特定プロジェクト研究(拠点研究、 術補佐員)の協力を得た。なお、本稿に記載の研究は、東北大学災害 ては、後藤さつき氏、網田早苗氏(東北大学災害科学国際研究所・技 らは、利用者数に関する情報をご提供いただいた。資料整理にあたっ 女川町観光協会、みらいサポート石巻、石巻観光協会、閖上の記憶か ンター)、高森順子氏(大阪大学大学院博士課程)によって行われた。 アーカイブセンター)研究員、渡邉敬逸主任研究員(人と防災未来セ マリ・リズ助教(東北大学災害科学国際研究所)、山崎麻里子(長岡 のほか、阪本真由美特任准教授(名古屋大学減災連携研究センター)、 いただいた。また、「災害かたりつぎ研究塾」の企画・運営は、 同研究所、現在、宮城学院女子大学)、川島秀一教授(東北大学災害 本稿に記載の一連の研究においては、首藤伸夫名誉教授 (東北大